様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００７８６

研究課題名（和文）児童のL2 WTCを促進する英語教育プログラムの開発・検証とその普及

研究課題名（英文）Development, Verification and Dissemination of English Language Education Programs to Promote Young Japanese Learners L2 WTC

研究代表者
物井　尚子（山賀尚子）（Monoi, Naoko）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：７０３５０５２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の概要は、英語学習の入門期にあたる児童３～６年生の「L2 WTCを促進する英語教育プログラムの開発・検証とその普及」である。初年度は、小学校での外国語活動・外国語科の授業を観察し、授業内の活動（やり取り）と連動した児童の「教室内におけるL2 WTC」（situated WTC)と「L2使用に関する自己効力感」（L2 perceived competence)の変化を振り返りシートで記録した。さらに児童用L2 WTC質問紙で「教室外でのL2 WTC」(trait WTC)を測定し、授業中の活動（やり取り）とL2 WTCの連動性について調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、授業中の活動（やり取り）と入門期の英語学習者である児童の「L2 WTC」および「L2使用に関する自己効力感」(L2 perceived competence)の変容をつぶさに捉えることで、英語に関する知識の獲得・技術の精錬に伴った学習者の心的変化を時系列で把握することができる。これらの概念は学習者の学習言語使用、また、運用能力との関係性が指摘されている概念であるため、その関係性を一般化することにより、多くの児童の外国語学習を促進することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：The outline of this research is the "development, verification, and dissemination of English language education programs to promote L2 WTC" for 3rd to 6th graders who are in the introductory stage of English learning. In the first year of the study, we observed periods of Foreign Language Activities and those of Foreign Languages in elementary schools and recorded changes in students' "situated WTC" and "L2 perceived competence" in conjunction with the activities (interactions) in the classroom using a reflection sheet. Furthermore, "trait WTC" was measured using the L2 WTC Questionnaire for Children, and the linkage between in-class activities (exchanges) and L2 WTC was investigated.

研究分野：外国語教育

キーワード：L2 WTC　L2 perceived competence　国際的志向性　L2不安　小学校英語　パフォーマンス評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2017 年に新学習指導要領が告示された。それに基づき、2020 年には新教育課程が全面実施となり、公立小学校での外国語活動（小学 3・4 年生）、外国語科（小学 5・6 年生）が開始された。本研究では、文部科学省が小学校段階での外国語活動および外国語科の目標とする「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を L2 Willingness to Communicate（L2 WTC, 学習言語を用いて他者と対話しようとする態度）と捉える立場をとる。L2 WTC は教育心理学、社会心理学の分野で用いられる心的概念である。現在、日本のようにコミュニケーション能力の育成を第一義とする外国語教育が世界的規模で拡大し、その一環として L2 WTC 研究が注目を集めている（Shao & Gao, 2016; Shirvan, Khajavy, MacIntyre, & Teherian, 2019）という学術的背景がある。

研究代表者は、2012 年に日本人成人用 L2 WTC モデル（Yashima, 2002; Yashima, Zenuk-Nishide, & Shimizu, 2004; Yashima, 2013）を参考に、児童用 L2 WTC モデルの検討に着手した。2016～2018 年度の 3 年間、毎年約 1、600 名の小学 5・6 年生、さらに 2017～2018 年度には、約 1, 400 名の小学 3・4 年生を対象に質問紙調査を実施し、国際的志向性、L2 使用に関する自己効力感、L2 学習意欲、L2 使用に関する不安感、外向性を含む日本人児童用 L2 WTC モデルを高学年、中学年に分けて構築した。このモデルから、英語を使用する頻度を高めるためには、L2 WTC の向上が一定の役割を果たし、教室内での英語指導により、L2 WTC 増強の実現可能性を明らかにすることが不可欠であると判断した。

２．研究の目的

本研究のテーマは、小学校での英語教育における児童の心理的効果に着目する「児童の L2 WTC を促進する英語教育プログラムの開発・検証とその普及」である。研究代表者は、2016～2018 年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（課題番号 16K02954）「児童用 WTC モデルから中学生用 WTC モデルへの縦・横断的調査」に従事した。前回提案した L2 WTC モデルを踏まえ、次の２つの研究課題を遂行することを目的としている。

（１）　複数の小学校で外国語活動・外国語科の授業を行い、授業内の活動と連動した児童の「教室内における WTC」（situated WTC）「L2 使用に関する自己効力感」（L2 perceived competence）の変化を振り返りシートで確認する。さらに児童用 L2 WTC 質問紙で「教室外における WTC」（trait WTC）を測定する。

（２）　児童の「教室内における WTC」（situated WTC）「L2 使用に関する自己効力感」（L2 perceived competence）を高める活動の特徴を探り、児童の L2 WTC を促進するための英語教育プログラムを開発する。

である。今回の調査では、先行研究で明らかにされていなかった L2 WTC モデルと教室環境での英語授業の関連性を明らかにし、教師による教育的介入によって日本人児童の L2 WTC が変容する過程を把握する調査を行った。これらの結果は、小・中学生の英語運用能力を心的側面から支援する際の大きな検討材料になることが期待できる。

３．研究の方法

（１）学年別振り返りシートの作成

毎時間の最終活動として「振り返り」の時間を 10 分程度確保し、振り返りシートを作成して児童の「教室内における WTC」と「L2 使用に関する自己効力感」を調査した。限られた時間で年齢の若い児童の振り返りを促すという観点から、質問数を限定した。例えば、小学 2 年生では、WTC について 2 問、L2 使用に関する自己効力感については 3～5 問の振り返りを行った。

表 1　振り返りシート質問項目の例（2 年生）

１．いろんなどうぶつの名まえを　えいごできいて　わかりますか。
　　いつもわかる　　だいたいわかる　　ときどきわかる　　まだわからない
２．いろんなどうぶつの名まえを　えいごで　いえますか。
　　いつもいえる　　だいたいいえる　　ときどきいえる　　まだいえない
３．先生がよんだ　ペットの本のおはなしが　わかりますか。
　　ぜんぶわかる　　だいたいわかる　　ときどきわかる　　よくわからない
（L2 使用に関する自己効力感）

４．○○先生、△△先生、□□先生に　えいごではなしてみようと　おもいますか。
　　とてもそうおもう　　そうおもう　　すこしだけおもう　　まだおもわない
５．クラスのともだちに　つぎのじかんに　　えいごではなしてみようとおもいますか。
　　とてもそうおもう　　そうおもう　　すこしだけおもう　　まだおもわない
（教室内における WTC）

６．今日のじゅぎょうの　かんそうを　かいてみよう。

表 2　振り返りシート質問項目の例（5 年生）

１．英語で　○○○先生に　あいさつできましたか。
（自信をもって）できた　　できた　　少しできた　　できなかった
２．みんなの前で自分の部屋の紹介を英語で言えましたか。
（自信をもって）言えた　　言えた　　少し言えた　　まだ言えなかった
３．友だちの部屋の紹介を英語で聞けましたか。
ほとんど聞けた　　だいたい聞けた　　少し聞けた　　あまり聞けなかった
４．あなたの部屋についての先生からの質問に英語で答えられますか。
（自信をもって）答えられる　　答えられる　　少し答えられる　　まだ答えられない
５．自分の部屋の紹介を英語で書くことができますか。
ほとんどできた　　だいたいできた　　少しできた　　あまりできなかった
（L2 使用に関する自己効力感）

６．○○先生、□□先生に英語で話してみようと思いますか。
とてもそう思う　　そう思う　　少しだけ思う　　まだ思わない
７．クラスの友だちに次の時間に英語で話してみようと思いますか。
とてもそう思う　　そう思う　　少しだけ思う　　まだ思わない
（教室内における WTC）

６．今日の授業で思ったことを書きましょう。

各質問に関して 4 つの選択肢を用意した。例えば、「いろんな動物の名まえを英語できいてわかりますか」という問いについては、「いつもわかる」「だいたいわかる」「ときどきわかる」「まだわからない」と述部で使用された動詞を変形させることで選択肢を作成し、児童が回答する際に混乱がないように配慮した。また、「L2 使用に関する自己効力感」については、学習者の知識の定着を尋ねる場合は「わかりますか」という問いかけ、学習者の技能の伸長を尋ねる場合には「できますか」という問いかけを用いることとした。動詞の時制を現在形にするか、過去形を用いるかについては、翌週にも活動が繰り返される可能性があるものは現在形（例．できますか）とし、本時で活動が終了するものについては過去形（例．できましたか）を用いた。言い切りの形で児童の反応が異なるかどうかについては今後さらなる調査が必要である。
最後に、児童が本日の授業の感想を自由に記入できる自由記述欄を設け、自身の言葉で発言できる箇所を用意した。

（２）児童用 L2 WTC 質問紙の使用
質問紙は、物井（2018）を使用した。中学年用は全 22 項目から成り、そのうち 3 問が「教室外における WTC」を尋ねる項目である。

① 知り合いの外国人が 1 人でいたら、英語で話しかけようと思います。
② 英語の授業で、みんなの前で、自分から手をあげて英語を話してみようと思います。
③ 英語を話せる日本人の知り合いが 1 人でいたら、英語で話しかけようと思います。

① については、自分の身近な人（複数人）に対して英語を積極的に使うか否かを問う項目であり、「英語のじゅぎょう中」という表現を加えることで、さらに状況設定を明らかにした。ただし、特定の授業日と関連付けた質問ではないため、振り返りシートの「授業内における WTC」の問いとは区別して分析している。年度当初および年度末に本質問紙を児童に記入させた。低学年では、5〜10 分程度で終了した。質問紙は 4 件法を用い、とてもそう思う（4）・そう思う（3）・あまりそう思わない（2）、そう思わない（1）の中から、もっとも自分の気もちに当てはまる数字に○をつけるというものである。
高学年用は全 44 項目からなり、そのうち 5 問が「教室外における WTC」を尋ねる項目である。質問紙は、物井（2015）を使用した。実施時間は同じく 5〜10 分程度であった。

① 初めて会った外国人が 1 人でいたら、英語で話しかけようと思います。
② 知っている外国の人が 1 人でいたら、英語で話しかけようと思います。
③ 英語のじゅ業中に、みんなの前で、自分から手をあげて英語を話してみようと思います。
④ 英語のじゅ業以外でも、友だち 3〜4 人の前でなら、英語を話してみようと思います。
⑤ 英語を話せる知り合いの日本人が 1 人でいたら、英語で話しかけようと思います。

②③⑤については、中学年用質問項目と同一である。①は、英語を使用する相手が初対面であり、かつ外国人である場合に話しかけるか否かを尋ねる問いである。④は、使用場面が教室外であることが明記されており、さらに、相手は友だち 3〜4 人という設定において、英語を使用するか否かについて問うている。質問紙は中学年同様に 4 件法を用い、とてもそう思う（4）・そう思う（3）・あまりそう思わない（2）、そう思わない（1）の中から、もっとも自分の気もちに当てはまる数字に○をつけるというものである。

（３） 時系列に沿ったデータ収集の過程

2019 年度は、A、B という 2 つの小学校に調査を依頼、児童の調査収集の許可を得た。A 小学校は 6 年生（64 名）、B 小学校は 5 年生（126 名）を対象として、授業計画を踏まえた授業後の振り返りシートの実施と L2 WTC 質問紙調査を行った。

①学習者の L2 WTC の変容を確認するため、活動別に「教室内における WTC」（situated WTC）「L2 使用に関する自己効力感」（L2 perceived competence）を振り返りシートに記録させた。この記録には、授業の最後の 5〜10 分を使用し、45 分間の活動に沿った児童の情意面の変化に着目することがその意図である。

②年度初め 4 月、9 月、そして 3 月の 3 回にわたり、児童の「教室外における WTC」（trait WTC）を測定する児童用 L2 WTC 質問紙を実施する予定であったが、COVID-19 の蔓延により、2 月下旬からの英語の授業が中止となってしまった。3 月に実施予定の「教室外における WTC」（trait WTC）は取りやめ、また年度末の英語試験（英検 Jr.）も中止となった。

2020 年度は、研究対象校での調査は行わず、初年度に収集した授業の映像、授業計画、振り返りシートを用いて、授業内の活動と教室内における L2 WTC、L2 使用に関する自己効力感の変容を多角的に分析する予定であったが、初年度の計画がコロナ禍で中断を余儀なくされたため、初年度の仕切り直しとして C 小学校（研究協力者の異動により A、B 校に代わる）3 年生を対象として授業実践を行った。ただし、対面授業が再開されたのが 2020 年 6 月下旬であり、授業観察は夏休み明けの 9 月以降からとなった。また、同学年に限定して教室内での調査を行った。

2021 年度は、コロナ禍により、小学校への出入り頻繁に行うことが困難であったため、C 小学校に限定して調査を行った。また、調査実施学年も 2 年生（低学年）と 5 年生（高学年）に限定した。

①学習者の L2 WTC の変容を確認するため、活動別に「教室内における WTC」（situated WTC）「L2 使用に関する自己効力感」（L2 perceived competence）を調査する振り返りシートを低学年用、高学年用の 2 種類作成した。

②高学年では「教室外での WTC」（trait WTC）を測定し、日々の振り返りシートとの関連性を分析した。

４．研究成果

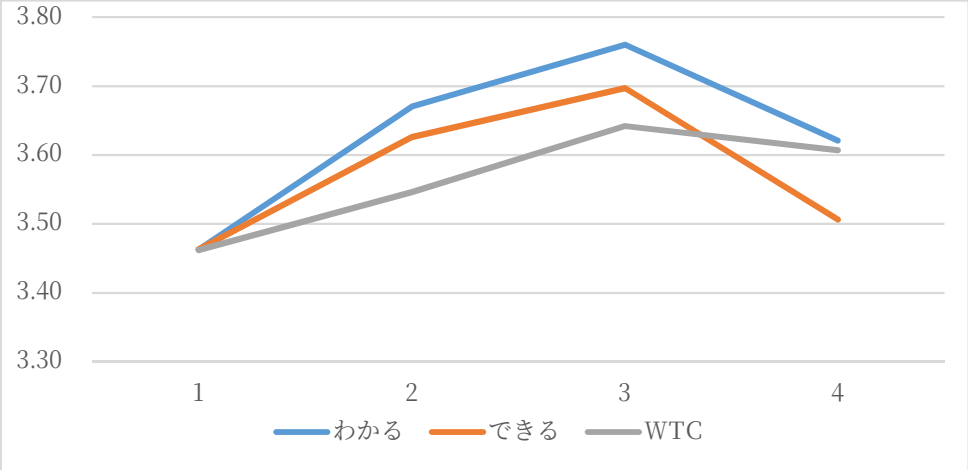
2020 年度には、小学 3 年生（中学年）、2021 年度には小学 2 年生（低学年）、小学 5 年生（高学年）を対象に数か月間、1 つの単元で連続した英語の授業を行った（4〜5 単位時間）。

（１）1 単元での「教室内における WTC」と「L2 使用に関する自己効力感」の変化

図 1 は、3 年生の数値の変化をまとめたものである「L2 使用に関する自己効力感（わかる）」と「L2 使用に関する自己効力感（できる）」の質問項目への回答は、傾向が類似しており、第 1〜3 回目までの数値が徐々に上がっている。ただし、第 4 回目の授業で、数値を落としている。第 4 回目の授業は、自分の描いた洋服のコーディネートを友人に伝える活動が主であったため、自身のスピーキングに関するパフォーマンスを振り返ることになり、 それまでの回よりも厳しい評価になったと考えられる。また、 「わかる」「できる」の質問項目を比較すると、「わかる」に対する回答が「できる」を、これまでよりもやや大きく上回った。「わかる」よりも「できる」の方が、自身の能力に関して一段階上の難度と捉えて評価していることが示唆された。「教室内における WTC」については、第 1〜4 回目までの授業を通して、ほぼ横ばいという結果であった。毎回の授業内容に左右されることなく、高い値を維持したことがわかる。

毎回の授業での「L2 使用に関する自己効力感（わかる）」の判断が変化するかについて、授業時間数を独立変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、統計的な有意差が確認された (F (2.44, 202.31) = 7.64, p < .001, ηp^2 = .08)。同じく、毎回の授業での「L2 使用に関する自己効力感（できる）」の判断が変化するかについて、授業時間数を独立変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、統計的な有意差が確認された (F (2.35, 178.80) = 4.55, p < .008, ηp^2 = .057)。毎回の授業での「できる」「わかる」の回答が統計的な有意差をもって異なった判断をしていることが明らかになった。一方、「教室内における WTC」に関して、授業時間数を独立変数とした一元配置分散分析を行った結果、統計的な有意差は確認されなかった (F (2.32, 171.38) = 1.06, p < .355, ηp^2 = .014)。授業回を重ねていくことによる「教室内における WTC」の変化はなかった。

図 1　一単元での「教室内における WTC」と「L2 使用に関する自己効力感」の変化（3 年生）



（２）「教室内における WTC」と「教室外における WTC」の関係性

教室と実社会の外国語使用に隔たりがあることを前提に、質問紙調査により、L2 WTC を「教室内における WTC」と「教室外における WTC」に区別をし、二者の関係性を量的に分析した。表 1 は小学 3 年生の授業時ごとの「教室内における WTC」、「授業外における L2 WTC」の相関をまとめたものであるが、数値にはかなりのばらつきが見られた（.036 < *r* < .495）（表 3）。他学年も同様の結果となった。

表 3　「教室内における WTC」と「授業外における L2 WTC」の相関（3 年生）

	第1回 sit-WTC	第2回 sit-WTC	第3回 sit-WTC	第4回 sit-WTC
trait WTC	.150	.036	.293**	.495**

注1. sit-WTC = situated WTC

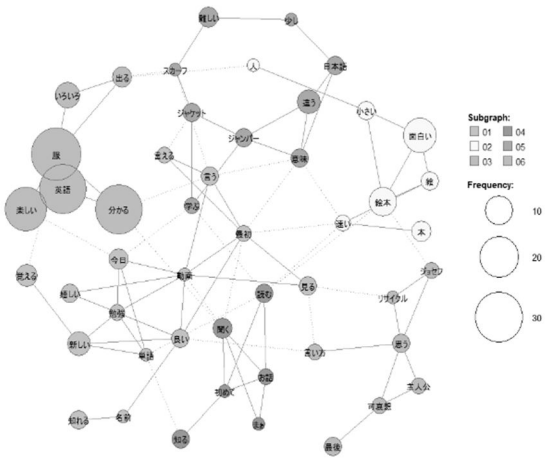
注2. ** = 相関係数は1%水準で有意 (両側) であることを示す。

（３）「L2 使用における自己効力感」と「教室内における WTC」の関係性

次に、「L2 使用に関する自己効力感」と「教室内における WTC」を測定した。3 年生においては、毎回の授業で中程度の相関が得られた（.303 < *r* < .598）。一方、「L2 使用に関する自己効力感」と「教室外における L2 WTC」との相関はほとんど確認されなかった（.100 < *r* < .224）。

ただし、「教室内における WTC」、「教室外における WTC」との相関が高くなった授業回もあり、その時間には「自分でデザインした服を英語で表現する」といった①実生活がイメージできる活動が行われ、②自己発信をする機会が与えられていたこと、が確認された。さらに、学年別の L2 WTC 質問紙の記述欄に関するテキスト・マイニング分析より、英語の授業での「わかる」「できる」という意識が強くなり、活動を通じて自身を評価する、客観視する傾向が見える。また、児童の授業中の関心が教師から自分へ、また授業の楽しさが単独の感情として存在するのではなく、「わかる」「できる」と併存することが確認された。他学年においても類似した傾向が確認された。

図 2　小学 3 年生の初回振り返りシート自由記述の共起ネットワーク



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 物井尚子、ジェームズ・A・エルウッド	４．巻 69
２．論文標題 大学生のL2 WTCと英語学習時間の相関―質問紙調査を通じて―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 99-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 物井　尚子	４．巻 20
２．論文標題 L2 WTC と関連要因の年齢差による影響	５．発行年 2020年
３．雑誌名 JES Journal（小学校英語教育学会紀要）	６．最初と最後の頁 196-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 物井　尚子	４．巻 68
２．論文標題 学習者の自己評価の正確さに関する年齢要因の影響：英語授業における小学４年生と２年生の自己評価の可能性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 James. A. Elwood, Naoko Monoi
２．発表標題 The Evolution of International Posture of Japanese EFL Students from Grade 7 through 12: A Longitudinal Study
３．学会等名 JAAL in JACET（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 物井　尚子
２．発表標題 L2 WTC と関連要因の年齢差による影響―小学３年生～中学3年生を対象とした横断的質問紙調査から―
３．学会等名 小学校英語教育学会全国大会岐阜大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 物井　尚子
２．発表標題 L2使用に関する自己効力感がL2 WTCに与える影響ー小学３年生の授業実践からー
３．学会等名 全国英語教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yuliia Chekhovska, Naoko Monoi
２．発表標題 Teacher Appearance as a Method of L2 Willingness to Communicate (L2 WTC) Development in Elementary English Class in Japan
３．学会等名 JACET 60th Commemorative International Convention（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 物井　尚子
２．発表標題 英語の授業のわかる・できるはどこから来るのか―小学２年生と３年生の振り返りシートを比較して―
３．学会等名 小学校英語教育学会関東・埼玉大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 James. A. Elwood, Naoko Monoi
２．発表標題 Changes in international Posture of Japanese EFL Students from Grade 5 through Grade 12: A longitudinal Study
３．学会等名 JALT 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	Ｊ・Ａ　Ｅｌｗｏｏｄ (Elwood James) (00400614)	明治大学・総合数理学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	星野　由子 (Hoshino Yuko) (80548735)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関